

●マイハート		
◇すべてはチームのために	山川幸則……	2
●連載／教育一語		
◇②子どもを変えるのは隣の子どもである	新宮弘識……	3
●特集／改訂新資料紹介		
◇平成 26 年度版『ゆたかな心』新資料紹介	……	5
●特集／改訂新資料 実践報告		
◇【実践報告①】 チームを支える力（5 年・「ホペイロのヤマさん」）	高垣和子……	9
◇【実践報告②】 東日本大震災資料から日本人のよさを考える （3 年「こまったときは、おたがいさま」）	岡田直美……	11
◇【実践報告③】 しぜんに したしむ ころろ （2 年「とりの たまごーファープルー」）	佐々井信子……	13
●連載／情報モラルと道徳		
◇資料とのコラボを考える	北川 忠……	15
●連載／「人間関係づくりの演習と道徳⑧」		
◇「協力」を体験しよう	土田雄一……	16
●連載／心に残る道徳授業		
◇低学年の道徳授業（2 年「はたけの 先生」）	加藤宣行……	17

本文中の勤務校は平成 25 年 12 月現在のものです。

絶賛発売中！

道徳授業ハンドブック

～道徳の“内容”をどのように考えるか～



道徳の内容項目を、わかりやすく解説！
ねらいを明確にもって授業に臨めます！

■新宮弘識 著

■定価 477 円＋税

■A 5 判／ 64 ページ

※市販はしておりません。購入については
下記にお問い合わせください。

03-3262-3270 光文書院 営業部

■小社 HP（「お問い合わせ」コーナー）などを通して「子どもの道徳」へのご意見・ご感想をぜひ
お寄せください。

<https://www.kobun.co.jp/contact/>



すべてはチームのために

FC東京 ホペイロ 山川 幸則



子どものころからサッカーが大好きで、小学校から高校までサッカー部に所属していました。毎日欠かさず練習に行っていましたし、スタジアムにもよく試合を見に行きましたね。残念ながら体が強くなかったので、プロの選手にはなれないとあきらめていました。

そんなあるとき、テレビで、ブラジル人のホペイロ（用具係）を特集している番組を見たんです。そのとき、「こういう仕事もあるんだ!」「自分も大好きなサッカーにかかわることのできる、こんな仕事に就けたらいいな」という思いを強くもったのを覚えています。

大学卒業後、一度は別の仕事に就職したのですが、やはり、「サッカーにかかわる仕事がしたい」という思いは膨らむ一方で、Jリーグのチームに、雇ってもらえないか、何度も手紙を出しました。しかし、どのチームも採用してくれませんでした。

そこで、23歳の時、サッカーの本場スペインに行き、修業をすることにしました。本場で本物のホペイロに仕事を教えてもらい、それを日本で生かそうと考えたのです。もちろん報酬なんてありません。日本でアルバイトして貯めたお金は、あつという間に無くなってしまいました（笑）。

わずか3か月間の修行でしたが、本場のホペイロについて学ばせてもらった経験と熱意を買われて、いまのチームに入ることができました。

ホペイロの仕事は本当に大変です。試合に用意する荷物はたくさんあるので、何度も確認するんですけど、ちょっとしたタイミングでどこに置いたか分からなくなったりすることもあります。

一度、何より大切なスパイクを忘れたことがありました。競技場に到着してから気がついて、すぐ残っている仲間に連絡を取りましたが、試合に間に合うかギリギリの時間でした。もちろん練習には間に合いません。急いで競技場近くのスポーツ

ショップで同じメーカーのスパイクを買って、練習のときにはそれを履いてもらいました。仲間の連携のおかげで、試合には間に合いましたが、さすがに落ち込みました。選手もスタッフもみんな、「全然大したことないよ」とか、「悩みなよ」「元気出せ」と言ってくれたんですけど、しばらくは、夜もなかなか眠れませんでした。それでも、体調だけはとにかく崩さないようにしていました。そのうち、悩んでいてもしかたないし、とにかくみんなに恩返ししなくてはと思うようになりました。今でもこの仕事は危ない仕事だから、人にはいい仕事だとか言えません（笑）。常に怖さと隣り合わせです。

でも、チーム全体として、ぼくたち裏方のスタッフも含めて、常に良い方向に進もうというような雰囲気があります。そして、選手や監督も、ぼくたちの意見を受け入れてくれています。

サッカーは、いい選手だけで勝てるわけではありません。選手もコーチも、スタッフも、そしてサポーターも、一体となって、勝利に向かっていくのだと思います。ぼくは、けっして試合の表舞台に立つことはありません。けれど、チームのために、自分にしかできない自分の役割があります。その役割をチームのみんながお互いに認め合い、その役割をそれぞれがきちんと果たせば、チームは自然と強くなるのだと思います。

チームが強くなると、海外での試合などもあり、試合数も増えて、ぼくの仕事はすごく大変になるのですが、それも楽しみです。これからもチームの勝利のために、がんばっていきたいと思っています。（談）

やまかわ・ゆきのり

1975年東京都世田谷区生まれ。大学卒業後、単独でスペインに渡り、スペイン一部リーグのリーガエスパニョーラで修業。2000年よりFC東京に加入。ホペイロとして、選手のシューズや練習着など、用具の管理などを行っている。

※山川さんの仕事については、『ゆたかな心』5年の新資料「11 ホペイロのヤマさん」に掲載しています。

※山川さんから子どもたちへのメッセージ動画を、教師用DVD『デジタル道徳』に収録しています。

子どもを変えるのは

淑徳大学名誉教授

教育一語を始めて20回になる。今回は、私の教育一語を提言したいと思う。

1. 45分の道徳授業によって子どもは変わる

45分間の道徳の授業で、子どもが変わるといえば、「道徳教育の成果を、短絡的に期待してはならない」とする意見が生じる。正論である。人づくりという教育であるから、道徳の授業を巨視的にみることは大切である。45分で子どもの生き方が急に変わるわけではない。然し、人間としてよく生きたいとする心が少しだけ変わることは確かである。

具体的に考えてみよう。一時間の道徳の授業で、子どもの心は確かに変わっていく。例えば子ども達は、「この話にでてくるAさんのすばらしいところは、困っている人がいることに気づいた所だね」「気づいただけではなく、その人の辛い気持ちが分かったこともすばらしいね」「だから、その人が困っているのをだまってみていられない心になれるのだね」「その心を思いやりの心というのではないだろうか」「それは、うわべだけの親切とは違うな」「思いやりの心から生まれた親切なんだね」等と道徳的理解や判断力を深める。これを受けて、「Aさんは、すばらしいね」「私は大好きだ」「私もそのような人になりたいな」等と道徳的心情を躍動させる。更にまた「わたしもAさんのような心がほしいな」「そのような心は私ももっているかな」「私も確かにもっている」「その心を大切にしていこう」等の道徳的価値の自覚や道徳的实践意欲を高めていくのである。

このような子どもの心の小さな変化は、時間を経ればまた、元に戻るかもしれないが、この学習を繰り返していくことによって子どもの生き方が変わっていく。その大切な営みが、道徳の授業である。人づくりという巨視的な見方が大切だから

といて、一時間一時間の道徳の授業を疎かにしてよいわけではない。

2. 子どもの心を変えるものは何か

前記した、子どもの心の小さな変化を生むものは何か。

子ども一人ひとりが生活の中で、様々な経験に遭遇したり、読書したりして人間の生き方を学び、心が成長していくことはあり得る。しかし、それらの学びは、個別的であるが故に独善的になりやすく、行為を生む心よりも表面的な行為に注目しがちになる。

そこで、道徳の時間で、つぎのように人間の生き方を他者に学ぶことが重要になる。

- ①、資料に登場する人物の生き方に学ぶ。
- ②、資料を読んだ友だちの考えに学ぶ。
- ③、資料を読んだ先覚者としての教師の考えに学ぶ。
- ④、道徳の授業からの発展として、親や身近な人々の意見を聞いて学ぶ。

このような学習は、自分是不完全な存在であるとする謙虚な心によって生まれ、「我以外、皆我が師なり」を体得する貴重な教育にもなるといえよう。

ここでは、「②、資料を読んだ友だちの考えに学ぶ」に焦点を当てて考えてみよう。

3. 子どもは友だちの考えを聞いて自分の心を拡充する

小学校3年頃から、仲間道徳期に入るといわれるように、大人の考えよりも仲間同士の約束事を重視し、友だちの是認や否認に重きを置くようになる。低学年でも、親の都合よりも友だちの都合を重んじる子どももみられる。子どもにとって、友だちの考えは重大である。ここに、子どもは友

隣の子どもである

新宮 弘識



だちの考えを聞いて自分の心を拡充する特質があるといえる。資料を読んだ友だちの考えを聞いて、「それは、私の考えとはちがうな」「そのような考えもあったのか」「新しいことを学んだよ」「それは、私の考えと同じだな」「やっぱりね。自分の考えに自信がもてたよ」「そういう考えはよくわからないな」「他の友だちの意見を聞きたいな」等と、自分の考えを拡充（拡は拡大の意味であり量的な広がり、「充」は、充実の意味であり、質的な深まりをいう）したり、疑問をもったりして、学び合いを進めていく。このような学び合いこそ重要であり、それは学校でしかできない心の拡充であり、それが道徳の授業の特質のひとつである。

このようにして子ども達が学び合い、人間のよさに関する考えを深めたり広げたり、心を動かし、実践意欲を高めたりしたとき、子ども達の目は輝く。高みに向かって生きている人の目は、きらきらと輝いており、魅力的である。

4. 子どもが子どもを変える授業を成立させる要点

子どもが子どもを変える道徳の授業を成立させるには、教師力が鍵になるが、特に、子どもの反応の道徳的な意味を明確にする教師の指導力が大切になる。

よい問いほど、子どもの反応は多様であるが、その反応は自分の考えを十分に言い表しているとはいえないことが多い。中には、自分の考えが道徳的にどのような意味をもっているかを自覚しないまま反応している子もいる。従って、その反応を聞いている他の子ども達も、その反応がどのような道徳的な意味をもっているかが認識できず、この状態では、道徳的に友だちに学ぶという学習は成立しにくい。

ここに、一人ひとりの反応を問い返したりして

その真意を聞き、その道徳的意味を明らかにさせるという教師の指導力が要求される。具体的に考えてみよう。

子どもの反応は、行為の善悪に関する反応、その行為を生む心に関する反応等、多様である。心に関する反応でも例えば、「人が困っていることに気がつく心の素晴らしさに注目した反応」「困っている人の事情を理解しようとする心の素晴らしさに注目した反応」「困っている人のために何とかせずにいられない心の素晴らしさに注目した反応」「自分にできる親切をしようとする積極的な行為の素晴らしさに注目した反応」等、多様であるが、このように反応の道徳的意味を明確にしなければ、道徳的な学び合いは成立しない。

さらに、例えば、困っている人に関心をもつ→事情を理解する→なんとかせずにいられない心をもつ→親切にするというように、子どもの反応を関係的に考え、それぞれがどのように関係しているかの構造を明確にすることも大切であろう。

以上、例示したように、子どもの反応を道徳的観点から考えさせ、その道徳的意味を明確にさせてこそ、「子どもを変えるのは隣の子どもである」とする教育が成立するのである。

なお、以上のような学習を成立させるには、その前段として、どのような資料を選定するか、どのような問いを共有させるかが重要になる。また、この学習をした後でも、教師や親や社会人の意見を聞いて学ぼうとする学習を如何に喚起するかが重要になろう。

この詳細は今後発行予定の『道徳授業ハンドブックⅡ・子どもが目を輝かせて学び合う道徳の授業をつくる42の要点』を参照されたい。

新規改訂版

平成26年度

『ゆたかな心—新しい道徳』

注目新資料紹介

1年

もうすぐ ニねんせい
＜4-(4)愛校心＞

大好きな先生がいてくれるから、学校が好き。
愛校心を考える温かい資料です。



2年

とりの たまご
—ジャン=アンリ・
ファーブル—
＜3-(2)自然愛、
動植物愛護＞

自然とのつきあい方を
幼少期のファーブル
から学びます。



3年

世界一うつくしい
体そうをめざして
—内村航平—
＜1-(5)個性の伸長＞

五輪体操・金メダリスト
内村航平選手が考える
“特長”の磨き方とは？



3年

お母さん、
かぜでねこむ
—ちびまる子ちゃん—
＜4-(3)家族愛＞

「ちびまる子ちゃん」の
お話から、家族愛につい
て考えます。



3年

こまったときは、
おたがいさま
＜4-(6)愛国心・国際理解＞

「こまったときは、おたがいさま」。東日本震災のお話を題材に、大事な心を考えます。



3年

こまるのはだれ？
これでいいのかな？
＜重点主題・きまりを守る＞

校庭におきっぱなしの
「ボール」くん。みんな
でかたづけのきまりをき
めませんが……。



『ゆたかな心』の教材開発 ㊦

先人の伝記・現役アスリートのさらなる充実と、マンガ・アニメ、現代（時事）的話題、実話・地域に暮らす人々の活躍等、多彩な視点による資料によって、道徳的心情を深め、多様な授業展開による「ゆたかな心」を育むことをねらいとしています。

4年

さか上がり

＜4－(4)愛校心＞

鈴木くんの苦手な「さか上がり」。鈴木くんの努力でクラスの間みんなも笑顔に……。



4年

自分たちができる エコ活動

＜重点主題・きまりを守る＞

ゴミの分別って何ですか？ ゴミ捨てのルールってなんだろう？



4年

かさ

＜2－(2)思いやり・親切＞

知り合いにかさを借りたさつきさん。今度は、自分が誰かに貸せるのでしょうか？



4年

石油列車、東北へ 向かって走れ！

＜2－(4)尊敬・感謝＞

東日本大震災直後、石油を東北へ運ぶために奔走した人々の実話です。



5年

帰ってきた、 はやぶさ

＜1－(5)真理・進取・工夫＞

いくつもの困難を乗り越えた「はやぶさ」には、人々の思いと工夫が詰まっていました。



5年

助け合い傘

＜2－(5)尊敬・感謝＞

大阪府堺市で40年以上続く「助け合い傘」。一人の力がみんなを助け、その輪がみんなに広がっています。





5年

氷上の挑戦 浅田真央

＜1-(2)高い目標・勇気、不とう不屈＞

2008年フィギュアスケート世界選手権。序盤の致命的なミスにもくじけず、演技を続けて手にした金メダル。ソチ五輪への挑戦へとつながる姿がオーバーラップされる、浅田選手の精神がここに！

5年

ホペイロのヤマさん

＜4-(3)社会的役割の自覚と責任＞

サッカーチームの縁の下
の力持ち、ホペイロ（用具係）のヤマさん。彼が仕事をがんばる理由とは……。



5年

富士観測所をつくるために

＜1-(2)高い目標・勇気、不とう不屈＞

100年以上前。野中到は信念をもって、富士山に気象観測所を作ること
を思い立ちます。



6年

温かいおまんじゅう

＜2-(1)礼儀＞

本当の礼儀ってなんだらう？
今だからこそ大切にしたい、大切な心を学びます。



6年

夢に向かって

—三浦雄一郎—

＜1-(2)高い目標・勇気、不とう不屈＞

70歳・75歳・80歳。
三度のエベレスト登頂を果たした三浦さんを動かす力とは？



6年

あやまってすむことじゃない

＜2-(4)謙虚・広い心＞

予約をミスした店員さん。謝る店員さんを見ていたばくは、あることを思い出します。



6年

カッコいいお父さん

＜4-(5)家族愛＞

えりは、お父さんがカッコよく思えません。ところがある日働くお父さんの姿を見て気持ちが変わります。



『ゆたかな心』が贈る，4つのコラム！

オリエンテーション（巻頭）



「道徳の時間」で学ぶこと。イメージを漠然としたものから，くっきりとさせていきます。
スムーズに授業へと導く扉となるオープニングのコラムです。

ことばのたからもの（巻末）



「ことば（名言）」には，古来からの生活の知恵や人生の指針が詰まっています。道徳で学ぶ内容にからめ，心がより深まる「ことば」を厳選しました。

情報モラル



新たに1・2年にも加え，全学年で体系的に構成し直しました。情報のスキル(技術)とは一線を画し，発達に応じた道徳的实践で考える「コラム」です。



※当コラムは1学期に配当しています。



活発な道徳の授業には学級内の深いコミュニケーションがもとになります。
確かな信頼関係と温かい人間関係を育み，同時に素直な自己表現も促す明るく楽しい「コラム」です。

人間関係づくり

チームを支える力

～5年「ホペイロのヤマさん」を使って

広島県福山市立西小学校教頭 高垣 和子



1. はじめに

光文書院『ゆたかな心』の新資料として、プロサッカーチームFC東京の裏方として働く「ホペイロ（用具係）のヤマさん（山川幸則さん）」という話が掲載される。この資料を使って5年生で行った授業の様子を紹介する。

2. 主題のねらい

この資料のねらいは「身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。」である。具体的には次の三点をねらって授業を展開した。

- ①集団の中には様々な役割があり、どの役割も重要だということがわかる。
- ②自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たすことが自己実現につながる事がわかる。
- ③自分の所属する集団に進んで参加し、協力して主体的に責任を果たそうとする。

3. 授業の実際

(1)資料に出会わせる前に

まず、「集団（チーム）」と「群れ」という二つの言葉を示した。「どちらも多くの人が集まっている状態というところが似ているが、この二つの違いはなんだろう」と問いかけた。

C：「群れ」というのは、同じことをしているけれどそれぞれがバラバラで協力していない。「集団」というのは、同じ目標に向かってお互いに協力している人たちの集まりのこと。

C：「群れ」というのは、目的意識がなくただ人がたくさんいるだけという状態。「集団」というのは、目的意識をもって自分から集まろうと思って集まっている人たちのこと。

というふうにみんなで整理した後、「今日はプロサッカーチームを支える力」というテーマで授業するのだけれど、「サッカーチームを支える人たちには、どんな人たちがいるだろうか」と質問した。

子どもたちは、選手、監督、コーチ、サポーターなど、様々な人々がチームを支えていることに気づいていた。そこで、サッカーチームが「勝利する」という目標を達成するための支えの一つとして「ホペイロ」という仕事があることを伝え、「ホペイロにはどのような役割があるのか考えながら資料を読もう。」という課題意識をもたせた。

本時は「何を考える時間なのか」「何を視点に資料と出会えば良いのか」を明確にすることが導入の目的である。

(2)資料からねらいにせまる

資料を読んだ後、すぐに「ヤマさんだって、もっと活躍できるみんなから注目される仕事があったのではないだろうか。どうしてヤマさんは、いつも目立たない縁の下からチームを支えることができるのだろうか」と発問した。

C：サッカーが好きだから。FC東京に勝ってもらいたいから。

C：自分がプレーしているわけではないけれど、選手と一緒に興奮できる。そんな仕事はなかなかないから。

C：チームが勝つためには、ホペイロという仕事の重要性がわかっているから。

C：自分ががんばることで、選手がより自分の力を発揮できるから。

C：目立たない縁の下の「ヤマさんのおかげでぼくたちが安心して試合ができるんです。」と選手の一人が言ってくれて、自分の価値を、わかってもらっていると思うとやる気

が出るのだと思う。

C：優勝セレモニーのとき、「シャーレ」を渡してくれて、「ぼくらはいつもヤマさんに何から何までお世話になっています。今回の優勝も『FC東京ファミリー』としてみんなががんばってきた結果なんです。」と言ってくれているように、チームのみんながヤマさんにちゃんと感謝しているということが、チームを支えていこうという前向きな気持ちの原動力になっているから。

というように、子どもたちは資料から、

①自分のがんばりでチームの優勝に貢献できているという自信が、すすんでチームを支える力になろうという原動力になる。

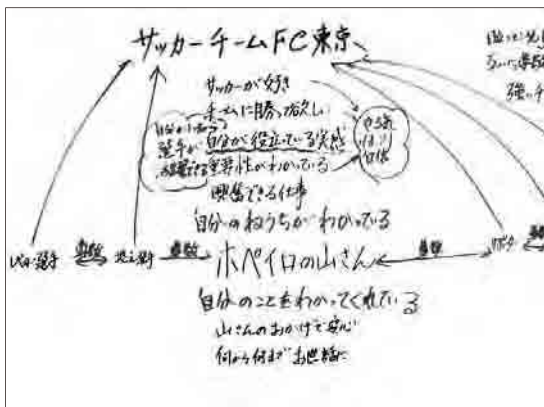
(自分の価値が自分でわかる)

②チームのみんなが自分の役割を理解していることが、すすんでチームを支えようという原動力になる。

(まわりが自分の価値をわかってくれている)

という二つの原動力をつかむことができた。

「チームのみんなが、お互いのがんばりを尊敬し合っているから、それぞれの力が最大限に発揮されて、優勝できるようなチームになるんだね。」とまとめ、板書もそれが明確にわかるように整理した。



(3)自分をみつめる

その後、「強い学級、学校を支える力の一人として自分はどんなことができるだろう」と問いかけた。

子どもたちが書いたワークシートから、主だったものを紹介する。

・みんなが仲良しで、いつもにこにこできるような学級が目標だから、わたしは、自分からクラス全員に「おはよう」と声をかけようと思います。

・わたしは、クラスみんなが「このクラスで良かった。」と思えるように、今まであまり話をしなかった人とも積極的に話をしてみようと思います。

・ぼくは、今までほかの人のがんばりにあまり気づけていなかったけれど、これからはクラスや学級のために掃除などをがんばってくれている人を見つけたいです。

・ぼくは、今まで掃除とかを本気でしてこなかったけれどこれからは目立たない仕事も本気でします。

・わたしは、図書委員会の仕事を今までもきちんとやってきたつもりだったけど、それが学校を支える力になっていることはあまり考えたことがありませんでした。これからは、「学校みんながたくさん本を読んで心が豊かになってほしい」という目標をもって、これまでに以上に本気で委員会活動に取り組みます。

・下級生たちも学校が楽しくなるように、給食放送の原稿を家でよく読んで練習します。

(4)日常生活につなぐ

子どもたちは、道徳の時間に、資料にある、すてきだなと思う人間の生き方にふれ、心を揺さぶられる。そして「ああ、自分も人間としてこのように生きていきたいな。」と心の中で決意する。しかし、それを具体的に日常生活の中で実践していくことは難しい。そこで重要なのは、指導者が、道徳の時間に生まれた「協力して、主体的に責任を果たそうとする心」を発揮して生きている子どもたちの姿を、具体的に生活の中で評価し続けることではないかと考えている。この授業の後、どれだけたくさん子どもたちに、「今、チームを支えるためにがんばっていたね!」と、声をかけられるかが勝負である。

指導者なら「学級や学校の誰よりも縁の下での力持ちでありたい」し、「目立たないところでがんばっている子どもたちの姿を、決して見逃してはならない。」と決意を新たにしている授業であった。

東日本大震災資料から、日本人のよさを考える

～3年「こまったときは、おたがいさま」の実践から～

千葉市立花園小学校 岡田 直美



1. 資料のねらい

「こまったときは、おたがいさま」は、光文書院道徳副読本『ゆたかな心』4年に新しく掲載される資料である。ねらいは、4-(6)「愛国心・国際理解」。日本の文化や伝統のよさを知り、それを大切にしようとするものである。東日本大震災という未曾有の大災害を題材に、日本人としてのよさとは何かを、考えさせる内容となっている。

2. 授業の実際

導入

- 日本のよいところを具体的に考えさせた。日本の国だからという意識はないが、自分たちの生活の中で便利なことや身近なことでうれしいなと思うことを挙げていた。
- できるだけ具体的なことがわかるように、意見を深めるような切り返しを行った。
- 「こと・もの」はたくさん意見が出たが、「ひと」についてはあまり着目していないようだった。あえて広げずに思いつくことで意見を出させた。
- あまり考えがうかばない児童もいたが、「外国と比べてみて」という補助発問により少し視野が広がったようである。しかし、日本特有の「こと」については、よくわからないようだった。

展開前段

- やはり東日本大震災については「大変だったんだ」というつぶやきもあり、悲しそうな表情の子どもたちもいたが、被災の状況よりも被災者の方たちの支え合いや譲り合いの精神、力になりたいと立ち上がったボランティアの人々の気持ちに焦点をあて、日本人のよさについて考えさせた。
- 助け合ったり支え合ったりして生活していることを知り、東北の方が頑張っていることや日本人のよさに気づくことができた。「こまったときは、おたがいさま」という日本人に受け継がれた思いやりの精神を知ることができた。
- 他国との違いに気づかせるために、外国の人か

らの高い評価も紹介し、日本人特有の心配りや気遣いの心であることを強調した。

- ワークシートを活用したことでいろいろな心を考えて書くことができた。

展開後段

- 小グループで話し合うことにより、一人では考えつかない意見にも気づき、多様な考えを引き出すことができた。
- 日本の国や日本人の独自のものという意識はもてないが、いいなと思うことや素晴らしいことだと思うことをたくさん考えさせた。
- 子どもたちの生活の中から日本人のよさをさらに探すことができ、その心を受け継いでいこうとする気持ちをもつことができた。
- 困難な時に互いに助け合うことの他にも日本人のよさを見つけないかということを通して、相手を思いやる日本人の心や精神を大切にしようとする気持ちをもつことができた。

終末

- 学校や家庭、地域などでの生活の中で、自分ができることについて考えることができた。
- 古くから受け継がれてきた日本人の心が今も変わらず残り、私たちの生活を支えていることを知ることによって、日本人であることに誇りをもち、気がついていなかった日本人のよさを認識できるようにした。

3. 考察

- 事後指導として、東日本大震災の時に人々がとった互いに助け合ったり支え合ったりした人々の感動的なエピソードを調べ、紹介し合うようにした。実践後、子どもたちは「おたがいさま」という言葉を使いながら、思いやりをもって生活する姿が見られた。
- 東日本大震災で支え合う人々の姿から今まで意識していなかった日本の国や日本人という独自の国民性に気づき、その素晴らしい心を継承していこうという気持ちをもつきっかけの授業となった。

4. 授業の展開

主な学習活動と発問（●留意点）	主な子どもの反応（C：子ども T：教師）
①日本のよいところを考える。 〈発問〉「日本のよさ」とは、 どんなことでしょうか。 ●よいところを具体的に想起させる。	C 町や道がきれい。安全で平和。 C 物がたくさんある。 T どんな物？ C 食べ物や文房具や服など。 C ゲームソフトとかたくさん新しい物が出る。 C オリンピックとかで応援がすごい。 T どんなふうにすごい？ C みんなでもり上がるし、団結している。
②資料「こまったときは、おたがいさま」を読んで、日本のよさを見つける。 〈発問〉「おたがいさま」にこめられた日本人の心とはどんなものだろう。 ●当時の様子がわかるように写真や挿絵などを使って、わかりやすく読み聞かせる。 ●ボランティアの人やおじいちゃんの言葉から、相手に対する思いやりの気持ちをもつことの大切さに気づかせる。 ●外国から見た日本人のよさも考えさせる。 ●ワークシートにまとめさせる。	T このお話を聞いて、どう思いましたか。 C 大変だったけど、ボランティアの人がたくさんいて助けてもらえたんだ。 C 自分が困っているのに、人のことまで考えていて優しい。 T 日本人の心ってどんなものだと思いますか。 C 列になっても文句を言わない我慢強い心。 C 困ったときこそ、支え合おうとする思いやり。 C 自分だけよければいいというのではなくて、相手のことも考える譲り合いの心。 C 「おたがいさま」と言える広い心。
③自分が知っている「日本人のいいところ」だと思ふことを発表する。 〈発問〉他に日本人のいいところを探してみよう。 ●日本人のいいなと思うことを友だちと話し合っ て考えさせる。 ●日本人であることを誇りに思えるような行動について考えさせる。 ●日本人としての話題やエピソードを用意しておく。	T 4人グループになって「日本人のいいところ」を話し合ってみよう。 C 長い列でも、割り込んだり怒ったりしないで自分の番が来るまでじっと待っている。 C 自分だけよければいいのではなく、みんなで分け合っている。 C ルールや約束や時間をちゃんと守るところ。 T たとえばどんなルールですか。 C エレベーターの右側をあけていた。 C お年寄りに席を譲る。 C みんなが使うものを大切に使う。 C ボランティアとか募金をよくしている。
④日本人として何を大切にしていきたいかを話し合う。 ●学級や家族などの集団の中で、自分ができそうな「おたがいさま」の行動について考えさせる。 ●「おたがいさま」以外でも「日本人として」という言葉でまとめさせる。	C 困っている人がいたら手助けしてあげたい C 相手のことを考えて行動したい。 C 日本人の素晴らしいところを増やしていきたい。 C 「おたがいさま」という言葉を使いたい。 C 外国の人にも優しくして、日本人のいいところを教えたい。 T これからも日本の国や日本人のいいなと思うところをたくさん探してみてください。

2年 しげんに したしむ ころろ

とりの たまご —ジャン=アンリ・ファール—



栃木県足利市立葉鹿小学校教頭 佐々井 信子

1. 資料について

1月・2月・3月は学年の終わりの時期である。子どもたちは、各授業の中で一年間のことをふり返り、自分の成長を再認識することとなる。動物とのかかわりも、その一つに入りたい。思えば、この一年間に動物の世話をしたことがある。そのときの動物の愛らしさを思い出せると、世話をしてきた自分の効力も感じることができる。さらにはそのとき動物とはどのような心の交流ができていたのかという視点を与えることで、動物に主体的な行動があったことや動物が幸せになることで自分もうれしくなったことを思い出し、動物との心の交流への理解がいつそう進む。それが自分中心の見方をやわらげ、よりよい自己の生き方を見つめ直すきっかけとなるが、その資料として「とりの たまご」を活用することができる。

この資料は、ファールبلの子ども時代の逸話をもとにしている。ある日のこと、ファールブルは山に出かけてノビタキという小鳥の巣を見つけた。巣の中には卵が数個あった。一つならもらってもいいだろうと思ったファールブルは一個の卵を手にとった。空からは親鳥が心配そうにジーという声を出していた。帰る途中、ファールブルは出会ったおじさんからたまごを取るとお母さん鳥が心配することを聞かされた。すると、ファールブルはお母さん鳥のことが気になり、卵を鳥の巣にもどしに返った。卵を巣にもどすとお母さん鳥はうれしそうにピーという声を出した。ファールブルも幸せな気持ちになったのだった。

ファールブルが鳥の巣から卵を取ったのは、いたずら心からではあるまい。卵の観察をしたり、自分で卵をかえしたいと思ったりしたことだろう。でも、おじさんに言われて、母鳥を悲しませることだと気づいたとき、それはできないと思い、鳥

の巣に卵を返した。

きっと、ファールブルはお母さん鳥の心配を身に迫って感じ、自分勝手な行動に良心の呵責を感じたのではないか。それは、ファールブルはお母さん鳥が心配していると言うのを聞いて、自分のお母さんのことを思い出したからに違いない。自分にもお母さんに守られての楽しい生活があった。その場面で、ファールブルの良心は育っていた。その良心を、母鳥が目覚めさせてくれたといえよう。

動物の世話をすることで良心が育ち、そして、その良心は、良い方向へ進む自分の背中を押してくれる。

2. 資料を使用時の事例

1)「とりの たまご」を読み、ファールブルの生き方について考える場面の例は次のようになる

まず、〈とりのたまごを見つけて、うれしくなったところはありませんか〉と問いかけると、次の発言がある。

- ・とりのたまごを見つけたとき。
- ・たまごを返したとき、母鳥が「ピー」ってないところ。

ファールブルは、二度うれしくなっているのでそれぞれのわけを聞いてみると、次の発言が出てくる。

- ・たまごを取ったとき、ファールブルは育てたいと思ったんじゃないかな。一つだけならいいだろうと思って、うれしくなった。
- ・たまごを返したときは母鳥の「ありがとう」が聞こえたんだと思うな。

そこで〈二つのうれしい気持ちは、同じかな〉と問いかけると、一斉に「違う」と返ってくる。それで、〈どうしてだろう〉と問うと、二度目のたまごを返したときのうれしさは、価値のあるうれしさであることが浮き彫りになる。

「とりの たまご」：平成26年度版『ゆたかなころろ—あたらし いろいろとく2年』収録予定

・「ジー」と「ピー」が違うよ。「ジー」は、暗い感じ。悲しそう。「ピー」は、明るい感じ。うれしそう。

・たまごをとったときは、ファーブル君がうれしくても、母鳥は悲しい。

・たまごを返したときはファーブル君もうれしいし、母鳥もうれしい。

子どもたちは、たまごを返したファーブルの行為を価値のある行為だと感じている。そこで、ファーブルが自身で自分の価値をつくりだしたことを明らかにするために、〈ファーブル君がとりのたまごを返そうとしたのは、何を大切にしていたからなのでしょう〉と問うと次の発言が続く。

- ・たまごをちゃんと育てることは、母鳥しかできないから。
- ・母鳥にとって、たまごは家族だもの。
- ・自分が鳥だったら悲しいと思ったんだよ。
- ・たまごを取ったのは、自分だけがうれしいから、だめだと思った。
- ・「ピー」は鳥の気持ちがファーブルに伝わって、ファーブルの気持ちが鳥に伝わったみたいだね。
- ・ファーブルは、鳥の気持ちを考えたら、鳥のことばが分かってきたんじゃないかな。
- ・取らなくても、よく見ているだけで気持ちがつながるんだよ。
- ・自分も鳥も、いい気持ち。
- ・動物も人も気持ちは同じだね。

子どもたちは、ファーブルが大切にしたいと思ったことを想像していくうちに、自分が動物の世話をしてきた体験や、自分がお母さんから大事にされてきた体験を思い出し、それを自分の意見の下地に据えている。そして、互いの意見を聞くなかで、興味本位の動物へのかかわりよりも、動物と心温まる交流を築く方が価値のあることだとの思いをもてるようになっていく。

2)自分の動物との交流をふり返ってみる。

まず、〈動物の世話をして気づいたことがあるかな〉となげかけると、次のように発言がある。

- ・犬をかつているけど、のどがかわいた感じが分かるよ。
- ・ねこは、すりすりするとうれしそう。気持ちが伝わってきたよ。
- ・金魚は、しゃべれないからエサをあげすぎないようにしているよ。トントンと水そうをたたくと、寄ってきてかわいいよ。

子どもたちは、動物とのかかわりの場を心の交流の場としてとらえる視点をもつことができた。そして、その心地よさを発言し、みんなに紹介することで、自分の心にできていた、動物を大切に思う良心に改めて気づくことができた。

ただ、事例を空で思い出すのはなかなか大変である。そのような場合に備えて、資料の続きのページには、「みなさんのまわりにはどんな生きものがいますか」「生きものの絵をかきましょう」「どんなふれあいをしていますか」「思ったことをかきましょう」という呼びかけ文のついた『ふれあいカード』が付いている。

そのカードに書き込むことを勧めると、次のように思いを深めることができた。

- ・学校のウサギにいつも朝キャベツをあげていると、ウサギが「ありがとう」って言ってくれているような気がするよ。
- ・モンシロチョウがお花にとまって、花のみつをすっていました。それを見て、すごくおいしいのかなって思いました。とてもおだやかな気持ちになりました。
- ・金魚の水そうを掃除すると、わたしも金魚もいい気持ちになります。金魚がすいすい泳ぎます。
- ・ネコが大好きです。ねこじゃらしで遊んであげると、ネコがほくをなめます。「ありがとう」っていつているみたい。
- ・ハムスターは、しゃべれないので、わたしはハムスターの気持ちを考えて、だっこしたり、はしごをつかって運動させたりします。うれしいといいな。
- ・動物はやさしいから、ほくもやさしい気持ちになるんだよ。あったかくて大好きです。

子どもたちは、動物とのかかわりを思い出し、心温まる場面の価値を再認識することができた。それは、自分にある動物を思う良い心を知ることだった。子どもは、動物とのかかわりを通して自分に良心を育てていた。そして、道徳の授業でその良心の存在を知ることによって、生きる力を得たはずである。良心は、自分を良いことに引っ張ってくれる。また、違う方向に進み始めているときにはブレーキをかけてくれる。

動物の世話をすることは、自分にそのような道徳性を備える行為でもある。学年が終わり新学期を迎える期に、理解を深めておきたい。

情報モラルと道徳③ ～資料とのコラボを考える～

石川県小松市立能美小学校 北川 忠



1 情報モラル4年「インターネットの落とし穴」

26年度版の「ゆたかな心」4年情報モラルは、ネット使用上の安全への配慮について扱われている。資料のねらいは、「危険に出合ったときは大人に意見を求め、適切に対応する」である。家庭において、児童が使用するパソコンに適切なフィルターがかけられており、最適なウイルスソフトが入っていれば、ある程度の危険は回避できる。しかし、児童が単独でwebページを見ることは、4年生という年齢から考えて好ましいことではない。使用するのは人であるから、トラブルが発生すればたとえ児童であっても使用者の責任が問われることになる。だから保護者の管理下で使い、「おかしいな」「変だな」と思える感覚と「危ないな」「やめておこう」と気づくことのできる感性を、早い時期に育てておくべきではないかと思う。つまり、自己管理できる力、節度ある生活である。そこで今回、コラボする内容項目は1－(1)にすることにした。

2 資料「心の体温計」1－(1)

本資料は、「度がすぎる」行為は後で困ることになるから、すっきりした生活を送るために自分で限度を決めて守ることの大切さに気づかせる資料である。この「度がすぎる」ということと、webページの危険回避をコラボさせてみることにした。情報モラルを取り上げる上で使用するキーワードは「有料」である。お金がかかれば後で困ることになるから、児童にもつながりが分かりやすくなるであろう。

3 ねらい

授業のねらいは以下のとおりである。

◎自立をめざし節度を守り、すっきりした生活しようとする。

- ・節度のある生活と度がすぎる生活の違いに気づく。
- ・インターネットでも節度が必要なことがわかる。
- ・度がすぎる生活をしていると後で困ることが

わかる。

- ・自分でできまりをきめて守り、すっきりとした生活をしようとする。

4 指導の流れと板書のポイント

導入でテレビの見すぎなど「〇〇の〇〇すぎ」について、親から注意された経験を想起させる。その結果どうなるかについても考えさせ右上に書く。これが板書の第一ポイント。続いて資料「心の体温計」を読む。黒板中央に体温計を貼り、主人公がすっきりした生活を送れるようになった理由について考えさせる。児童から出た考えは右下に書く。これが第二ポイント。ここまですべてを20分くらいで通過したい。

次に資料「インターネットの落とし穴」を読む。「有料」の文字カードを黒板左上に貼り、主人公が偉いなどと思えることは何かについて問う。すると、「おかしいと思ったときに父親を呼んだこと」などに気づく。これを左下に書く。これが第三ポイント。父を呼ばずにこのまま続けるとどうなるかについて問えば、有料のキーワードが提示されているので「お金がかかる」や「親に迷惑がかかる」「しかられる」等の後で困ることが分かる。これを黒板の左上に書く。これが第四のポイント。最後に中央に貼った体温計の平熱のラインを延長し黒板の左はじから右はじまで伸ばしていく。すると黒板全体には、節度を守る生活を送るために度がすぎないようにすることが示されていることに気づくだろう。終末で「自分の生活でどんなことを工夫するか」についてワークシートを書かせれば、児童は自分の生活をふりかえり、よりよく生きるための工夫を考える。ワークシート記入には15分程度の時間はぜひ、とってほしいと思う。

5 授業後も定期的にチェック

誘惑に負けずに、節度を守った生活が続けることは難しい。つい流されてしまう心はだれにでもあるのではないかな。だからこそ一人のときに自分を止められる節度を大切に扱いたいと思う。

「人間関係づくりの演習と道徳⑧」

～「協力」を体験しよう～

千葉県市原市立白金小学校校長 土田 雄一



1 「協力」を体験しよう

今回は趣向を変えて、協力体験の動的演習を紹介する。「信頼・友情、男女の協力」などの内容項目に関連し、「仲間と支え合う」を体験するものである。実際に協力することの難しさと大切さ・楽しさを体験することで、道徳の資料の内容に共感しやすくなる。ここでは、用意する道具も少なく、汎用性の高いものを紹介する。

2 わりばしで「協力ゲーム」

わりばしは身近な素材であり、100円ショップでも安価で大量に購入できる。このわりばしを使って行う演習を紹介する。ルールは簡単だが意外に難しく、ペアの協力が不可欠である。

■わりばしペアリレー

【やりかた】

- ①わりばしがバトン代わり。
- ②2人組で、手のひらと

手のひらの間にわりばしを挟んで行うリレー。

【発展】

- ①前掲のペアリレーを3人組で行う。中心の人は両手で左右の人とバランスを取らなくてはならない。
- ②児童の実態に応じて、4人組、5人組など人数を増やして行くと協力の必要度が高まる。



■わりばしサークルゲーム

【やりかた】

- ①5・6人のグループで両手の間にわりばしを挟んで、円をつくる。
- ②演習1／そのままの状態ですぐ右回りに2周する。（できたら左回りに2周）
- ③演習2／そのままの状態ですぐしゃがむ。落とさないように立ち上がる。3回くりかえす。
- ④演習3／そのままの状態ですぐ決められた場所まで移動し、落とさないように戻ってくる。

■わりばし

パスキャッチゲーム

【やりかた】

- ①5・6人グループで円を作る。
- ②各自が持っているわりばしを、「せーの」で同時に右隣にパスをする（投げる）。
- ③左隣からパスされたわりばしを両手で落とさずキャッチできたら成功。（右回りで成功したら左回りに挑戦）

【発展】

- ①キャッチを片手にする。難易度が高くなる。
- ②5・6人での成功が難しいときは、2人組のパスキャッチから始めるとよい。



このパスキャッチゲームは、相手のことを考えたパスが重要になる。自分中心のキャッチだけの意識ではなかなか成功しない。協力の意識が自然と高まる。他にも、2人組でわりばしとわりばしの間にボールや風船を挟んで運ぶリレーなどがある。自分たちで考えたゲームでもよい。

3 「協力ゲーム」を生かすために

わりばしを活用したゲームに限らず、協力を必要とするゲームは数多くある。そのゲームを、ゲームだけで終わらせないポイントが2つある。

- ①ゲームの合間に、「作戦会議」を入れる。
- ②ゲーム終了後に、「ふりかえり」の時間をとる。

この2つを意識して実施すると、その後（あるいは、その前）の道徳授業につながるだろう。

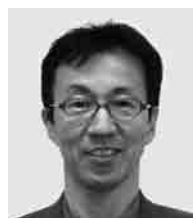
4 道徳授業と関連させて

「協力」に関連する内容項目2-(3)の授業とつなげて実施するとよい。重点主題として扱われている「支え合う仲間」（5年）や「みんなのために何ができるか」（4年）*と関連させると、より効果的である。実感を伴う話し合いができ、資料に自分を重ねやすくなるだろう。

*『ゆたかな心』（光文書院）掲載

低学年の道徳授業

はたけの 先生



筑波大学附属小学校 加藤 宣行

1. 資料について

本資料は、『ゆたかな ころろ』2年生版(光文書院)に収録されている、主に「尊敬・感謝」という内容項目を学習するために書かれた資料である。一見単純な内容であるが、川上さんがなぜはたけの先生をしているのか、そのためにどのような努力をしているのか、苦勞を乗り越えてはたけの先生を続けているもとにある心は何か、等を考えることで、価値の構造化ができる資料である。2ページ目に、自分たちがお世話になっている方々のことを考えられるワークシート的なものがついている。もちろんこれを使っても構わないが、私はこれがなくても充分子どもたちは自分自身の身の回りの方々をイメージしながら学習に参加できると考えている。実際、授業では子どもたちの方から「〇〇さんも同じだね」等の発言が出てきた。

2. 内容項目・展開について

小学校第1学年及び第2学年

2-(4) 日ごろお世話になっている人々に感謝する。

感謝の気持ちが高まるためには、お世話になっている人たちがどんなことをどのような思いでしてくださっているかを、子どもたち自身が気づき、実感するように展開を工夫する必要がある。そしてその様な人たちに共通することを考えさせることで、子どもたち自身の身の回りにいらっしゃる様々な人たちに対する理解が深まり、感謝の念が自ずと生まれてこよう。

3. 本時のポイント

今回は実践の中から次の3点を明らかにしたい。

- ①資料を読む観点を与える導入
- ②自分自身のことを重ねて考える発問

③子どもたちの板書への参加

4. 授業の実際

(1) 資料名 「はたけの 先生」
『ゆたかな ころろ』(光文書院)

(2) 内容項目 2-(4) 尊敬・感謝

(3) 本時の展開

(『』は教師 「」は子ども)

①資料を読む観点を与える導入

『「ありがとう」を言いたい人にはどんな人がいますか』

「家族」「友だち」

「電車をきれいにしている人」「お医者さん」

「人以外だけど、家の猫」

(ここで子どもたちの発言をカテゴライズした)
『家族、お仕事頑張っている人、人以外の3つが出ましたね。他にもいるかもしれないね。お話を読んで考えよう』

『川上さんにもありがとうがあるかな』

「ある」

『それは、お仕事頑張ってくれているからかな』

「ちがう」

『川上さんがしてくれていることはどんなことですか』

「植え方を教えてあげている」

「<大丈夫だよ>って声をかけてくれている」

「草取りをしてくれている」

『草取りは、みんながいるときだけしてくれているのかな』

「みんながいないときもしてくれている」

『そうか、みんながいないときも準備や後片づけをしてくれているんだね』

(川上さんがいつも頑張ってくれている様子を時系列で考えさせることで、資料に書いていないことまで気づかせることができた)

②自分自身のことを重ねて考える発問

『川上さんが頑張ろうと思っているもとにあるものは何ですか』

(川上さんの努力に充分気づかせた上で、本質を問う発問をした)

「子どもたちのために何かをしたい」

「楽しんでもらいたい」

「みんなにおいしいって思ってもらいたい」

「さつまいものことをちゃんと教えてあげたい」

「先生、そういうことなら保谷のおじさんもそうだね」

(「保谷のおじさん」というのは、保谷にある本校の農園を管理してくださっているおじさんのことで、子どもたちは折あるごとに収穫や野外活動でお世話になっている。本質をとらえることで、子どもたちは自ずと自分の身の回りの人々に目を向け始めるのである)

『なるほど、川上さんのように、仕事でなくても頑張ってくれている人がいるのですね。』

③子どもたちの板書への参加

『もっと他にもいそうだね。思いついた人、黒板に出て書いてごらん』



(ほとんどの子どもたちが黒板に出て書いていた。多かったのは「先生」だった。ご丁寧に「かとう先生」と書いてくれる子どもも多く、なんだかうれしい気持ちになった)

『こういう人もいるよ』

(教師が用意した用務主事さんの写真を黒板に貼る)

「ああ、〇〇さんだ」

『みなさんの身の回りにも、お世話になっている人がたくさんいることに気がきましたね。そういう人たちに何と言いたいですか』

「いつも私たちのためにありがとう」

『そうだね、今日の勉強で「ありがとう」の意味がふくらみましたね。そういうありがとうが言える人っていいですね』

(4) 児童の反応

お世話になっている人はぼくたちのみのまわりにおいて、その人たちは、みんなを幸せにしたいと思いながら町をきれいにしたり、おいしいご飯を作ったりしてくれるんだと思います。そんな人たちにかんしゃしたいです。(男子)

川上さんはみんなのためにしている。楽しんでもらいたいからだと思う。私のマンションのかんり人さん、わたしがいつもあいさつをすると「えらいね」と言ってくれるのでうれしいです。ありがとうを言いたいです。ほかにも学校をそうじしてくれるようむ主事のMさんも、みんなが気持ちよくすごせるようにきれいにしてくれているので、ありがとうを言いたいです。(女子)

5. 授業後の考察

「そういう人ならもっといる」と言って、わっと黒板に出て書き始める子どもたちを見ていて、『ああ、やっぱり本質は転移するんだな』と思った。きちんと気づき、実感すれば、子どもたちは自ずと自分自身を重ねて考え始めるのである。『さあ、自分たちの身の回りにはどんな人がいるかな』などと改めて問いかけなくても、ごく自然に意識は流れ始める。そのような自然の流れの中で1時間が構想できたら、筋の通った、子どもたちとつくる授業ができるのではないだろうか。

